

[研究ノート]

## ジャコバイト辞典 (1)

浦田早苗

### (A)

#### **Aberdeen** — アバディーン

ディ(Dee)川とドン(Don)川に挟まれたスコットランド北西の古都。1745-46年のジャコバイトの乱の際、1746年2月10日マリ卿率いるジャコバイト軍が立ち寄ったが、27日には政府カンバーランド軍が入城して1ヵ月以上ここに陣を張った。

#### **Abigail Masham, Baroness Masham (1670-1734)** — メイシャム男爵夫人、アビゲイル

ジョン・チャーチルの妻セーラの従姉妹で、セーラによってアン女王の女官にとりたてられる。後にアン女王の寵愛を受け、従兄弟のロバート・ハーリとチャーチルの政争にアンの影響力をもって関わってくる。1711年にセーラが宮廷を去るとその影響力は増大し、トーリ(後の保守党)の全盛期成立に大きな役割を果たした。



#### **Act of Attainder, 1702** — 1702年の私権剥奪法

ウィリアム3世が制定した法律で、ジェームズ2世が英国に上陸した場合は死刑判決を下し、ジェームズ2世を支持するものは所領・称号を剥奪したうえで死刑に処するというもの。



### **Act of Attainder, 1715 — 1715 年の私権剥奪法**

1715 年のジャコバイトの乱に際し、ジャコバイトを支援するものは所領・称号を剥奪したうえで死刑に処するというもの。



### **Act of Attainder, 1746 — 1746 年の私権剥奪法**

1745 年のジャコバイトの乱に際し制定された。1702 年、1715 年の私権剥奪法より厳しく、ジャコバイトを支援するものは所領・称号を剥奪し、死刑に処するとし、継嗣の相続を禁じた法。



### **Act of Grace, 1752 — 1752 年の恩赦法**

Act of Oblivion とも呼ばれる、ジョージ 2 世が 1745 年のジャコバイトの乱に関わり罪人とされたものに与えた恩赦。



### **Act of Proscription (Dis-clothing Act), 1747 — 武装解除法**

タータンチェック及びキルトの着用を禁じた法で、1782 年まで 35 年間施行された。



### **Act of Restoration, 1784 — 返還法**

1745 年のジャコバイトの乱で没収した土地を、ジャコバイトの氏族長及び遺族に返還する法。



### **Act of Union, 1707 — 合同法**

それまで個別の存在であったイングランド議会とスコットランド議会が合同され、連合王国(The Kingdom of Great Britain)の誕生を謳った法。これによってエディンバラ議会は廃止され、スコットランドはウェストミンスター議会上院議員 16 名、下院議員 45 名を送り込むことになった。議会や王宮がイングランドに置かれたことからわかるように、これは両国の平等な連合とは言い難かった。1997 年に労働党ブレア政権の誕生によって、

同年スコットランド自治議会の開催が住民投票で可決され、スコットランド議会は1999年の総選挙によって選出された129名の議員によって復活した。開会宣言は「1707年3月25日より一時中断していた議会を再開する」というものであった。




 **Albany, Count of** — オルバーニ伯爵位

ローマ法王から与えられたチャールズ・エドワード・スチュアート(ジェームズ2世の孫)の爵位。ジャコバイトの宮廷があった街に由来する。

 **Albemarle, 1<sup>st</sup> Earl of, Arnold Joost van Keppel (1670-1718)** — 初代アルベマール伯爵

ウィリアム3世の小姓からイングランド貴族にまで出世したオランダ人の軍人。男色家として名高かったウィリアムの、ポートランド伯爵に代わる愛人。子孫の第7代伯爵ウィリアムの息子ジョージの妻アリスはエドワード7世の公妾であったが、アリスの曾孫のカミラはチャールズ皇太子妃となった。



 **Alberoni, Giulio (1664-1752)** — アルベローニ枢機卿

イタリアの枢機卿でスペインのフェリペ5世に仕えた政治家。ジャコバイトを支援し、1719年の乱ではスペインの軍勢を英国に送りこんだが嵐のため艦隊は壊滅し、残った兵もグレンシールの戦いで敗走した。この計画の立案・遂行の責で、彼はスペインから追放された。





**Amelot de Chaillou, Jean-Jacques (1689-1749)** — アムロ大臣

1737年から1744年のフランス外務大臣で、1744年にチャールズ・エドワード・スチュアートをローマからパリに招聘した人物。チャールズのパリ出現により、1744年のフランス軍による英国侵攻作戦が失敗する。



**Anne of Great Britain (1665-1714)** — アン女王

ジェームズ2世の次女で姉はメアリ2世。1688年のウィリアムの英国上陸に際しては父ジェームズ2世のもとを離れ、ウィリアムに投降する。生涯17人の子供を身籠るが、うち15人が早産死、死産であった。最も成長したグロスター公爵も、11歳で死亡する。晩年はアルコールの摂り過ぎで、歩行困難なほどの肥満に悩まされていた。



**Anne Churchill, Lady (1683-1716)** — アン・チャーチル

マルボロ公爵ジョンとセーラのチャーチル夫妻の3女。1702-12年アン女王の御寝所係女官を務め、1700年サンダーランド伯爵チャールズ・スペンサーと結婚し、3男2女をもうける。次男のチャールズの家系が第2次大戦中の英国首相ウィンストン・チャーチルに、また3男のジョンの家系が元皇太子妃ダイアナに繋がる。マルボロ公爵位は、姉のヘンリエッタが継いだ。




**Anne Livingstone, Lady (1709-1747)** — アン・リビングストーン


第5代リンリスゴウ伯爵ジャームズ・リビングストーンの娘。1724年第4代キルマーノック伯爵ウィリアム・ボイドと結婚する。1745年のジャコバイトの乱では、居城であったカレンダー・ハウスでファルカークの戦いの前後にチャールズ・エドワードを厚くもてなした。夫のキルマーノック

伯爵は彼女の影響もあってジャコバイト軍の指揮官に取り立てられるが、1746年のカロデンの戦いで捕えられ、ロンドン・タワーヒルで断頭刑に処せられた。



 **Anne Marie d'Orleans (1669-1728)** — アン・マリー  
 ジェームズ2世の妹ヘンリエッタ・アンの娘で1684年にサヴォイア公爵ビクトール・アマデウス2世と結婚した。1714年にアン女王が亡くなると、従姉弟のジェームズ・エドワードと共に英国王位要求者となる。彼女の要求はジェームズ・エドワードの息子、チャールズ・エドワードの誕生まで続く。



 **Anson, George, 1<sup>st</sup> Baron Anson (1697-1762)** — アンソン提督  
 英国艦隊司令長官で、1747年3月のケープ・フィニステル海戦で14隻の英艦隊を率い、9隻のフランス艦隊すべてを、また10月の同海戦では、8隻のフランス艦隊中6隻を撃沈した功績により男爵に叙せられた。1751-56年及び1757-62年は海軍大臣(First Lord of the Admiralty)として海軍の拡充に努めた。



 **Appin Regiment** — アッピン連隊

1745年のジャコバイトの乱に参加した典型的なハイランダー・ジャコバイトの連隊。連隊長の大佐の下に、補佐する少佐が1名つき、それぞれ6名の大尉、中尉、少尉、曹長、12名の軍曹と400名の兵からなっていた。




**Arabella Churchill (1648-1730) — アラベラ・チャーチル**

ジョン・チャーチルの姉でバーウィック公爵の母。ヨーク公爵ジェームズ(後のジェームズ2世)の寵愛を受け、公女アンの女官となった。ジェームズ2世がメアリ・オブ・モデナと再婚後も関係が続き、4人の子供をもうけた。1696年のウィリアム3世暗殺計画は、バーウィック公爵がアラベラを訪問したため発覚する。


**Argyll, John Campbell, 2<sup>nd</sup> Duke of, 1<sup>st</sup> Duke of Greenwich (1678-1743) — 第2代アーガイル公爵、ジョン・キャンベル**

スペイン継承戦争ではジョン・チャーチルの下で戦歴を重ねた軍人で、1711年スペイン戦線英国陸軍司令官として活躍。シェリフミュアの戦いの政府軍指揮官で、1715年のジャコバイトの乱鎮圧後、1719年にグリニッジ公爵位を拝命する。1736年陸軍元帥に昇格し、1742年英国陸軍総司令官になる。


**Arne, Thomas (1710-1778) — トーマス・アーネ**

英国国歌 'God Save The King (Queen) — 神よ我らが国王を救いたまえ' の編曲者。この歌の歌詞には最終の第6節まで固有名詞はでてこない。6節に初めて「ウェード将軍が反逆せしスコットランド人を打ち破る」という言葉があるが、1745年10月発行のジェントルメンズ・マガジンにはこの歌詞はなかった。また同時期ジャコバイトにより歌い継がれた第6節というものもあり、そこでは「God bless the Prince, Charlie」となっていたという。



右下図：1745年10月15日の「The Gentleman's Magazine」に掲載された楽譜

**Ashton, John (c.1653-1691) — ジョン・アシュトン**

ジェームズ2世妃メアリ(Mary of Modena)付の牧師で、1688年の革命以降はプロテスタント・ジャコバイトの指導者の一人。1690年アイルランドで戦っていたジャコバイト軍への援軍をルイ14世に要請するため、フランスに渡ろうとしたところを逮捕され、1691年に処刑された。

**Assassination Plot, 1696 — フェンウィック陰謀事件**

ウィリアム3世暗殺計画。首謀者フェンウィックが逮捕され、その審理のなかで彼は陰謀に関わったものの名前をあげたが、そこにはウィリアムの英国王位を画策したジョン・チャーチルや、ウィリアム招聘状にサインしたラッセル、シュールズベリと並んで当時の首相職であった大蔵卿ゴドルフィンの名前もあった。そのため政治的に処理しようという政府の判断によって審理の場が裁判所から議会に移され、十分な審理がなされないままフェンウィックをはじめ3人の首謀者が処刑され幕を引いた。

**Atholl, Dukes of — アソル公爵位**

スコットランドの由緒ある伯爵位で、1626年にジョン・マリ(John Murray of Tullibardine)に与えられ、1676年に侯爵位に1703年に公爵位に上げられた。1715年のジャコバイトの乱に際し、ウィリアム・マリがジャコバイトに加担したため没収されたが、1724年に弟のジェームズが爵位と所領を継ぐことが許された。ウィリアムの次男が、1745年の乱でジャコバイト軍の実質的指揮官となったジョージ・マリ卿。



### Atterbury, Francis (1663-1732) — フランシス・アタベリ

オックスフォード大学クライスト・チャーチのチューターを経て、1713年からロチェスタ主教。1714年、アン崩御直前に枢密院議員になったため、ジョージ1世の信を得られず、また1715年のジャコバイトの乱に対するウィッグ政府の処断の惨さに憤り、ジャコバイトになったとされる。1717年からジェームズ・エドワードと連絡を取り合う。陰謀発覚により国外追放になり、1732年パリで客死した。



### Atterbury Plot, 1722 — アタベリ陰謀事件

1722年に予定されていた総選挙の間隙を狙ったジャコバイト蜂起計画。この計画はロチェスタ主教フランシス・アタベリを中心に練られたもので、南海会社の理事と収賄を受けた大臣達に対する怒りが全国を席卷していた時期、議会在解散され国王がハノーヴァ滞在中という虚をついて、ディロン将軍率いるアイルランド連隊がイングランド南部に、またオーモンド公爵率いるフランス・スペイン連合軍がテムズ河を遡りロンドンに上陸するというものであった。しかし、この計画はフランスからも漏れ伝えられており、クーデター計画が実行されようとした直前の1722年4月19日、前首相で計画に加担していたサンダーランド伯爵が原因不明の急死を遂げ、彼の自宅からジャコバイトとの通信文書が押収された。その日のうちに全軍に臨戦体制がとられ、ハイド・パークに近衛連隊の野営地が設営され、マッカートニー将軍がアイルランドから軍を率いロンドンに向かった。また、ネーデルラントにも援軍の要請がなされ、さらにフランスからジャコバイトへの援助がないことが確認され、この計画は潰えることとなり、危機は一旦収まった。





### Aughrim — オーリム

アイルランドのゴールウェイ地方の町。  
1691年7月12日フランス-ジャコバイト軍と政府軍との間に決戦が行われた。政府軍の死者3,000名に対しジャコバイト軍の死者は4,000名といわれ、政府軍の勝利となった。この戦いにより、1689年から続くジャコバイト蜂起の趨勢は決した。



上図：アイルランドにおける最大の決戦場となった碑



### Avignon — アヴィニョン

1309年から1378年までローマ教皇庁が置かれたフランス南部の都市。1348年から1797年まではローマ教皇の所領であり、多くの亡命ジャコバイトが居を構えた。ジェームズ2世の長男、ジェームズ・エドワードは1716年4月2日から1717年2月6日までと、1727年8月23日から12月20日までここに滞在した。またジェームズ・エドワードの長男、チャールズ・エドワードも1748年12月27日から1749年2月25日まで滞在している。



## (B)

### **Balblair** — バルブレア

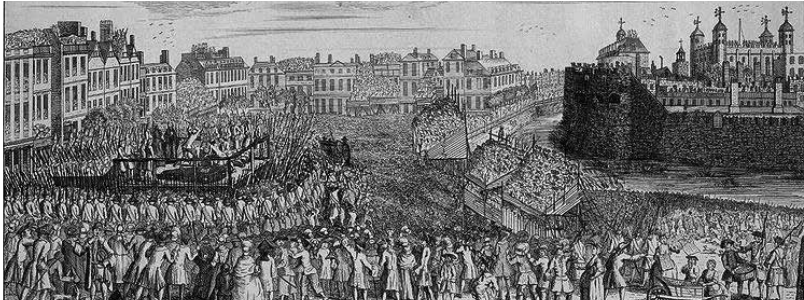
スコットランド、ネアン(Nain)の西、カロデンの決戦場から8マイルほど離れた町で、1746年4月カンバーランド公爵がここに戦陣を張った。

### **Balmerino, Arthur E, 6<sup>th</sup> Lord (1688-1746)** — バルメリノ卿

名うてのジャコバイトで1715年の乱に加担し、囚われたものの1733年に恩赦を受け、のちに1745年の乱に再度加わりチャールズ・エドワード軍の近衛騎兵連隊を率いた。カロデンで捕らわれ、ロンドンで断頭刑に処せられた。



下図：M. Cooper 画「The executions of Kilmarnock and Balmerino at Great Tower Hill, on 18 August 1746」




### **Bannockburn House** — バンノックバーンの館

1746年1月に病に倒れたチャールズ・エドワードが療養した館。この時チャールズを看護したのが城主の姪であったクレメンティーナ・マリアで、彼女はその後チャールズと関係を持ち1753年にチャールズの娘、シャルロツテを出産する。



 **Baron Culloden** — カロデン男爵位

1746年のカロデンの戦いの勝利の褒章として、ジョージ2世がカンバーランド公爵に与えた爵位。

 **Berner Barraks** — ベルネラ・バラックス


1719年のジャコバイトの乱をみてスコットランド・西ハイランド Glenelg に造られた兵舎。200名の兵士が駐屯でき、1745年のジャコバイトの乱後も再建されたが、1790年からは廃墟となっている。



 **Berwick, James FitzJames, 1<sup>st</sup> Duke of Berwick** (1670-1734) — 初代

バーウィック公爵、ジェームズ・フィッツジェームズ  
ジェームズ2世とジョン・チャーチルの姉アラベラとの子。1687年に公爵位を授かり、1689年のボイン河戦では父ジェームズ2世と共に戦う。その後フランス軍に籍を置き、フランス軍陸軍元帥にまで上り詰めた。ルイ14世からフランス公爵位を、フェリペ5世からスペイン公爵位を受ける。1734年、ポーランド継承戦争の戦場で斃れた。



 **Betty Burke** — ベティ・バーク

カロデンの戦いの後、チャールズ・エドワードは半年近い逃避行をスコットランドで続けたが、スカイ島の貴族フローラ・マクドナルドはチャールズを女装した自分の侍女に変装させ、捜査の手から守った。その際チャールズにつけられた偽名。

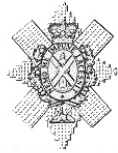


## **Black Friday, 1745** — 1745 年の暗黒の金曜日

1745年12月4日、ジャコバイト軍がロンドンから200キロ離れたダービーを陥落させたとのニュースがその2日後の12月6日金曜日にロンドンに伝わると、首都はパニックに落ち入り、国王ジョージ2世は故国ハノーヴァへの逃避も考え、人々はイングランド銀行に殺到して取り付け騒ぎがおこった。

## **Black Watch Regiment** — 黒い監視兵連隊

1715年のジャコバイトの乱後、ハイランドの治安維持のため、1725年にウェード将軍により6個のハイランダー監視兵(Highland Watch)中隊が組織された。濃紺緑色のタータンチェックを纏っていたため、当初からBlack Watchと呼ばれ、1739年には6個中隊が統合されて政府スコットランド連隊となる。タータンチェックの着用を禁じた1747年の武装解除法は、この政府軍連隊には適用されなかった。



## **Blair Castle** — ブレア城

1269年に建設が始まったアソル公爵家代々の居城。1745年には政府軍の駐屯地となったが、1746年ジャコバイト軍のマリ卿によって落城した。19世紀に改修され、現在は第11代アソル公爵の居城であるが一部が一般公開され、スコットランドの最も優雅な城の一つとして人気を集めている。



## **Blenheim, The Battle of, 1704** — ブレンハイムの戦い

スペイン継承戦争(1701-1714)中の1704年に争われたバイエルン選帝侯国 - 仏連合軍対英 - 奥




同盟軍の間の戦闘。フランス連合軍の死傷者・捕虜は 34,000 名に及び、仏軍総司令官タラール元帥も捕らわれるというスペイン継承戦争での英同盟軍最大の勝利。この戦いの総司令官はジョン・チャーチルであった。

 **Blenheim Palace** — ブレナム宮

ブレンハイムの戦いの功績により、アン女王は約 8 km<sup>2</sup> の土地を総司令官ジョン・チャーチルに与え、建築家ジョン・ヴァンプラの設計によるバロック様式の宮殿を建てさせた。世界遺産でもあるこの宮殿は、ジョンの子孫で第 2 次大戦中の英国首相ウィンストン・チャーチルの生家でもある。



 **Boyd, William, 4<sup>th</sup> Earl of Kilmaenock (1704-1746)** — 第 4 代キルマーノック伯爵、ウィリアム・ボイド

1715 年のジャコバイトの乱では父と共に政府側についたが、1745 年の乱では妻アン (Lady Anne - カレンダーハウスの城主) の影響もあってチャールズ・エドワードを支持しジャコバイト軍の指揮官として、ファルカークの戦い、カロデンの戦いで兵を率いた。カロデンの戦いで捕らわれ、1746 年 8 月 18 日ロンドン・タワーヒルで断頭刑に処せられた。



  **Boyne, Battle of** — ボイン河の戦い

1688-89 年の革命で王位を奪われたジェームズ 2 世は、1689 年 3 月 12 日、王位奪還のためフランス軍を率いカトリック国アイルランドに上陸して進撃を続け、3 月 24 日にはついにダブリンに入城してアイルランド議会を召集した。さらに 1690 年 6 月のビーチ・ヘッドの海戦でフランス軍が大勝利を収



Jan Wyck 画「Battle of the Boyne」

めドーヴァ海峡の制海権を握ると、アイルランドのジェームズ軍に呼応する形でフランスの協力を得たジャコバイトの英国進攻が発覚する。これを機にウィリアム3世は、軍勢を率いてジェームズとの決戦に挑んだ。ジェームズはウィリアムをボイン河畔の都市ドロヘダ(Drogheda)で待ち受け、7月1日早朝戦闘が始まった。政府ウィリアム軍36,000に対しジャコバイト軍は23,000と劣勢であり、政府軍優勢で戦いは推移した。14時頃には勝敗は決し、ジェームズはダブリンに撤退後フランスに戻った。ジャコバイト軍の死者は1,500名、政府軍は750名とされている。

 **Braemar Castle** — ブレーマー城

1715年のジャコバイトの乱に際し、1715年9月に第6代マー伯爵、ジョン・アスキンを挙兵した城。マー伯爵はジョージ1世に忠誠の誓いをしておきながら、この城で反乱の準備を整えていった。1628年に建造された城は




1715年政府軍によって破壊されたが、1748年に再建され2006年に修復が始まった。地下牢を備えるいかにも無骨な戦乱期の趣のあるこの城は、チャールズ・エドワードが纏ったキルトを展示し、2008年から一般公開されている。

  **Brogues** — ブローグス


スコットランド・ハイランダーの靴。柔らかな鹿皮をいくつものピースに分けて作られており、ハイランドに多い河川や泥炭地を歩き回れるように水を排出する小さな穴が数多くつけられているが、それが後のブローグ・シューズの飾り穴に受け継がれている。



 **Butcher** — ブッチャー (屠殺者)

カロデンの戦い後、カンバーランド公爵のジャコバイトの落ち武者狩りに対する残虐ぶりから、彼につけられたあだ名。カンバーランド公爵は、戦場に傷つき斃れた者にはもちろん、インヴァネスまでの道々負傷者を匿った家では女性・子供にまで容赦なく殺戮を続けた。カロデンの戦場には傷ついたジャコバイト兵が運ばれた農家があったが、そこはカンバーランド公爵による虐殺が最初に行われた場でもあった。カロデンの古戦場には、戦いの慰霊碑が建っている。



 **Bute, 3<sup>rd</sup> Earl of, John Stuart (1713-1792)** — 第3代ビュート伯爵、ジョン・スチュアート

母がアーガイル公爵の娘のスコットランド貴族で、1723年に伯爵位を継ぐ。皇太子時代のジョージ3世のチューターとして、彼の即位後権勢を振るった。政治的にはトーリ(後の保守党)であり、1762年に首相に任命された直後ウィッグ(後の自由党)優位の時代は終焉をむかえたが、政治家としては無能でわずか1年で首相を辞任した。



 **Butler, Charles, 3<sup>rd</sup> Duke of Ormond (1671-1758)** — 第3代オーモンド公爵、チャールズ・バトラー

オーソリ(Ossory)伯爵の次男で兄はオーモンド公爵ジェームズ。1715年のジャコバイトの乱に加担した兄の没収された称号を買戻し、1745年に兄の死去後第3代オーモンド公爵となる。隠れジャコバイトであり、ジェームズ・エドワードにも重用され、1722年にはジャコバイト貴族アラン公爵位を受けた。





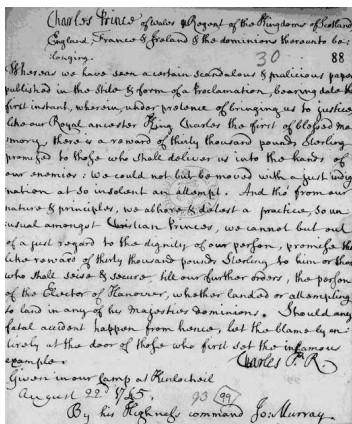
## Butler, James, 2<sup>nd</sup> Duke of Ormond (1665-1745) — 第2代オーモンド公爵、ジェームズ・バトラー

1688年祖父から公爵位を継いだアイルランド軍人。1711年スペイン継承戦争英国陸軍総司令官に任じられたが、トーリ内閣からのフランスとの交戦回避の指示を受け入れたため、後にウィッグに弾劾される。1715年のジャコバイトの乱の準備をすすめたが発覚し、乱を起こす前にフランスに渡り、スペインの庇護のもと亡命生活を送った。



## Byng, Admiral John (1704-1757) — バイニング提督

トリントン子爵の4男で13歳から海軍に入隊し、1745年のジャコバイトの乱では英国海軍少将としてフランス・スペインの艦船に対峙し、英国への侵入を妨げた。フランスとの7年戦争中の1756年、フランス軍にミノルカ島を奪われた責により軍法会議で有罪とされ、1757年に処刑された。



1745年7月25日スコットランドに上陸したチャールズ・エドワードは、8月3日のロンドン・ギャゼット(London Gazette)に掲載された記事で自分に3万ポンドの懸賞金が掛けられたことを知ると、ジョージ2世を捕えた者に同額の賞金をだすことを宣言した。(The National Archives : SP36/67.)



## (C)

**Cadiz** — カデイス

スペイン西部の港で1719年のジャコバイトの乱では第2代オーモンド公爵軍がこの港から出帆したが、激しい嵐に遭遇してケープ・フィニステル沖で壊滅してしまう。

**Callendar House** — カレンダー・ハウス

スコットランド、ファルカークの郊外にあるカレンダー伯爵の居城。1746年1月17日のファルカークの戦いの前に城主レディ・アンがチャールズ・エドワードを厚くもてなした城。チャールズは、ここで飲酒と舞踏に興じた。

**Calvay** — カルバイ島

北西スコットランド、サウス・ユイスト島のボイスデール湖に浮かぶ小島。1746年のカロデンの戦いに敗れたチャールズ・エドワードは、この島でフローラ・マクドナルドの侍女、ベティ・バークに変装して逃亡を続けた。

**Cameron, Archibald (1707-1753)** — アーチボルト・キャメロン

キャメロン氏族長の父ジョンが、1715年の乱に参加し失敗後亡命したため、フランスで育つ。1745年の乱には兄ドナルドと共に参戦するが、敗北後はフランスに渡る。その後スコットランドに戻ったところを捕らえられ、1753年に1745年のジャコバイトの乱最後の断頭刑者として歴史に名を刻んだ。





**Cameron, Donald, 19<sup>th</sup> Chief of Lochiel (1700-1748)** — ドナルド・キャ

メロン

ハイランドの有力氏族キャメロン家の当主。1745年のジャコバイトの乱では弟アーチボルトと共にチャールズ・エドワードに仕えた。カロデンの戦いでは重傷を負うが、その後は逃避行を続け、チャールズ・エドワードと共にフランスに渡った。その後はフランス軍に身を投じ、1748年バーグ(Bergues)の戦いで斃れた。



**Cameronian Regiment** — キャメロン連隊

もともとは長老派集会(Cnventicles)の警護のため組織されたりチャード・キャメロン率いる警備隊で、1688年の革命に際して政府連隊に組織された。以後はジャコバイトの乱で政府スコットランド連隊としてジャコバイトと戦った。Lochielのキャメロン氏族とは関係がない。



**Campbell, John 4<sup>th</sup> Earl of Loudoun (1705-1782)** — 第4代ロードン

伯爵、ジョン・キャンベル

スコットランドの軍人で、1745年のジャコバイト乱では甥のジョンを連隊中佐にし、自らは大佐として政府騎兵軍を率いた。プレストンパンズの戦い、インヴァネスの戦いでジャコバイト軍に大敗を喫し、指揮官を退く。



 **Campbell, John, 5<sup>th</sup> Duke of Argyll (1723-1806)** — 第5代アーガイル公爵、ジョン・キャンベル

スコットランド有力貴族第5代アーガイル公爵。1745年のジャコバイトの乱で、ファルカークの戦い、カロデンの戦いに参加した陸軍軍人。1744年から下院議員を務め、1770年に公爵位を継ぐ。1796年には、英国陸軍元帥にまで上り詰めた。



 **Carlisle Castle** — カーライル城

スコットランド国境に近いカーライルの砦に11世紀に築かれた城。1745年のジャコバイトの乱で捕らわれた127名のジャコバイトが、この城の牢獄に収容された。全く光の入らない15畳程の地下牢に、立錐の余地もなく押し込められた囚人たちには水も食料もほとんど与えられなかったため、彼らは喉の渇きを凌ぐため、交代で壁から染み出るわずかな水を舐めあつたという。ジャコ



Lick Stone

バイトたちの舌と唇で抉れてしまった壁跡リック・ストーン(Lick Stone)や、彼らが壁に刻んだ文字が残されている。審理に至る前に牢獄で2名の死者を出し、残された囚人はすべてこの城で絞首刑に処せられた。スコットランドの人々に愛されている「ロッドホ・ローモンド」の詩は、処刑の前夜に若きジャコバイトが、この牢獄で恋人を慕って作ったといわれている。



Rebels taken from Carlisle Castle for execution at Gallow's Hill, 1746

(Carlisle Library)



**Carlos II d'Espagne (1661-1700)** — カルロス 2 世  
スペイン・ハプスブルク家最後の国王。精神障害と上顎前突症による咀嚼不全を抱えていた。フェリペ 4 世の死去後 3 歳でスペイン国王となるが、その御世はスペインの衰退期にあたる。生前から彼の死後のスペイン領土が政争の焦点にあったが、フランスのオルレアン公爵フィリップ 1 世の娘、マリア・ルイサと結婚したことが、全ヨーロッパを巻き込むスペイン継承戦争につながった。



**Caroline von Brandenburg-Ansbach (1683-1737)** — キャロライン妃  
ジョージ 2 世妃。ウォルポールを公私にわたる相談役とし、ウォルポールもまた、政治的才覚のあった聡明な王妃がもつ国王への影響力を見越して、重要政務をキャロラインと話し合っていた。妃は音楽家のヘンデルとも親交が厚く、ヘンデルはジョージ 2 世の即位とともに英国に帰化した。ジョージ 2 世はヘンリエッタに代表される多くの愛人を持つが、キャロラインの死後 23 年に渡り生涯再婚はしなかった。



**Carteret, 2<sup>nd</sup> Earl Granville (1690-1763)** — カートレット  
イングランドの政治家で、1721 年南海バブルで失脚したクラッグスの後を継いで国務大臣に、その後 1724-30 年アイルランド総督を務める。ハノーヴァの利益を重視する政策をとり、ジョージ 2 世に重用される。1742 年に国務大臣に再任されたが、ピットらの野党議員に攻撃され、1744 年にグランビル伯を拝命し下院を後にした。1751 年から亡くなるまで、枢密院議長を務める。





**Catherine of Braganza (1638-1705) — キャサリン妃**

ポルトガル国王ジョアン4世の娘で、英国王チャールズ2世妃。多くの愛人をつくったチャールズ2世に悩まされつつも、後継ぎができなかったこともあって、1693年までイングランドに留まった。彼女が毎日紅茶を飲んでいて、英国人の紅茶好きの習慣につながったといわれている。



**Caulfield, William (1698-1767) — コーフィールド大佐**

ウェード将軍の後を継いで、コリィヤリック峠道などハイランド一揆鎮圧のための道路造りをした軍人。ウェード将軍の400kmの道路と40の橋に対し、彼は1400kmの道路と600の橋を築く。1745年のジャコバイトの乱ではジャコバイト軍がこれらの道路を進撃、退却のため利用することになる。



**Charles I of England (1600-1649) — チャールズ1世**

1642年勃発したピューリタン革命において1649年に処刑された国王で、チャールズ2世、ジェームズ2世の父。ジェームズ2世がカトリックによる専制体制を確立しようとしたのは、ルイ14世の影響が大きいとされるが、それ以上に、いかに国王といえども処刑の憂き目にあうことを幼いうちに学んだジェームズ2世が、英国の体制自体を恐れていたことによる。





### Charles II of England (1630-1685) — チャールズ 2 世

1660 年、王政復古により英国王に即位する。結婚前から多くの愛人を持ち、結婚後もさらに増やした。認知しただけで 14 人の庶子がいたが、嫡子はなかった。愛人や庶子に叙爵や屋敷を気前よく与え「陽気な王様(Mary Monarch)」とあだ名された。



### Charles Edward Stuart (1720-1788) — チャールズ・エドワード・スチュアート

ジェームズ・エドワードの長男でジェームズ 2 世の孫。観戦武官として戦争を眺めたことはあったが、従軍の経験は無かった。1744 年のフランスによる英国侵攻は彼がバりに姿を現したことにより発覚する。これを悔やんだチャールズは翌 1745 年、自ら準備を整えスコットランドに上陸し、ハイランダーの助けを借り、ジャコバイトの乱を起こした。ロンドンまであと 200 キロに迫ったが、1746 年のカロデンの戦いで敗北し、逃亡生活後フランスに舞い戻り、英雄としてヨーロッパの人々にもてはやされた。その後、怠惰な生活を送りアルコール中毒になる。51 歳の時に 20 歳のストルバーク選帝侯女ルイーゼと結婚したが数年しか持たず、さらに退廃的な不健康な生活を送り、「麗しのチャーリー王子(Bonnie Prince Charlie)」とスコットランドの人々から慕われた影はすっかりなくなっていた。晩年はフィレンツェ、ローマで過ごし、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂に父と弟と共に眠る。



**Charlotte Stuart, Duchess of Albany (1753-1789)** — オルバーニ女公

爵、シャルロツテ

チャールズ・エドワードと、彼が1745年のジャコバイトの乱で知り合ったクレメンティーナとの間の子。チャールズはこの母娘に冷たく、彼女達はチャールズの父ジェームズ・エドワード、後にチャールズの弟のヘンリ枢機卿から援助を受けた。シャルロツテはその後結婚し3人の子供をもうけたが、その誕生も長い間秘密にされていた。1784年にチャールズが認知し、オルバーニ公爵位を受け継いだ。

**Churchill, John, 1<sup>st</sup> Duke of Marlborough (1650-1722)** — 初代マルボ

ロ公爵、ジョン・チャーチル

植民地タンジール守備隊大尉にはじまって、一代にして位階を極め、公爵にまで上り詰める。姉のアラベラがヨーク公時代のジェームズ2世の愛妾であったため、ジェームズ2世に重用された。また、妻セアラがアン女王の幼馴染であったことから、スペイン継承戦争英国陸軍総司令官として活躍した。第2次世界大戦中の英国首相ウィンストン・チャーチルの先祖。

**Claim of Right, 11 April 1689** — 権利の主張

スコットランド議会在が宣した、ジェームズ2世(スコットランド国王ジェームズ7世)が反憲政的な行為により王位を失い、代わりにジェームズの長女メアリとメアリの夫オレニエ公ウィレムの戴冠を認めるというもの。

**Clan Act, 1715** — クラン法

スコットランドのクラン(氏族)における族長と族員の絆を断ち切る目的の法。ジャコバイト族長のもとでも、政府に忠誠を誓うものは2年間住まい

の賃料を無料にし、逆に政府派族長の下でジャコバイト側についた族員の財産はすべて族長のものとなるとされた。

### **Clan Badge** — クランバッジ

それぞれのクラン(氏族)が持っていたクランを表すバッジ。多くはスコットランド特有の植物をモチーフとしていた。ジャコバイトのバッジは、ロサ・アルバ(Rosa Alba)をモチーフにしている。ロサ・アルバは Jacobite Rose、Bonnie Prince Charlie's Rose の別名を持ち、バラ戦争で戦ったヨーク家の白バラともいわれている。



### **Choiseul, duc de, François (1719-1785)** — ショワズール公爵

フランス陸軍の将軍で、1758-1761年及び1766-1770年フランスの外務大臣を務め、英仏7年戦争下の外交を担った。1770年にフォークランド島をめぐる英国とスペインの間の緊張が高まると、スペインを後押ししようとしたが、戦争に辟易したルイ15世に咎められ解任された。



### **Clement XI, Pope (1649-1721)** — クレメンス11世

在位1700-1721年のジャコバイトを支援したローマ教皇。ジェームズ2世の長男、ジェームズ・エドワードが1719年にポーランド王女クレメンティーナ・ソビエスカと結婚すると、彼らをローマに招き住居と別荘、多額の年金を与えた。







### Clemens XIII, Pope (1693-1769) — クレメンズ 13 世

ボローニャでイエズス教徒としての教育を受け、パドヴァの司教を経て、1758 年から教皇。1766 年、父ジェームズ・エドワードの死去を受けて、チャールズ・エドワードは英国王チャールズ 3 世を名のったが、時のローマ教皇クレメンズ 13 世は、アルコール依存症の上、悪い噂の絶えないチャールズを英国の正当な王位継承者と認めることを拒否した。



### Clementina Walkinshaw (1720-1802) — クレメンティーナ

チャールズ・エドワードの愛妾。父は裕福な商人で、ジャコバイト。1746 年に叔父のバンノックバーンの館に滞在中にチャールズ・エドワードと知り合い、その後もチャールズと関係を持ち、1753 年にチャールズの子シャルロッテを出産した。二人の関係は、後にウォルター・スコットの小説「レッドゴントレット (Redgauntlet)」に描かれている。



### Clifton — クリフトン

カーライル近郊の村で、ここで 1745 年のジャコバイトの乱の戦闘があった。イングランドにおける最後の戦場をしめす記念プレートが村の両端に掲げられている。(イングランド最後の戦場については、1838 年の Bossenden Wood の戦い、第 2 次大戦の Battle of Britain 等諸説がある。)





### Clifton Moor Skirmish — クリフトン・ムアの戦い

1745年のジャコバイトの乱では、ジャコバイト軍はロンドンまであと200kmのダービーを陥落させた。しかし、ジャコバイト軍進撃のあまりの早さにフランス軍の援助が追いつかず、不利な情報ばかりが届く中、チャールズ・エドワードは風雪のなか冬を迎えるよりは戦線の立て直しに一時スコットランドに退くという意見を受け入れざるを得なかった。ジャコバイト軍は、マンチェスター、ランカスターを通りスコットランドに引き上げる途中で政府カンバーランド軍の騎兵に追いつかれ、カーライル近くのクリフトン村で後衛のマリ卿と政府軍との間で戦闘がもたれた。夕暮れから始まった戦いは月明かりの中でも続き、夜目のきくジャコバイト軍の勝利に終わり、軍の本隊はスコットランドに入ることができた。この時のジャコバイト軍の死者は12名、若干の負傷兵があったのに対し、政府軍の死傷者は100名を超えた。戦いで犠牲になったジャコバイトの遺体は、戦い終了後戦場端にあったオークの樹の下に埋葬された。クリフトン村に残るその樹は、後にRebel Treeと称される歴史的樹木となる。

